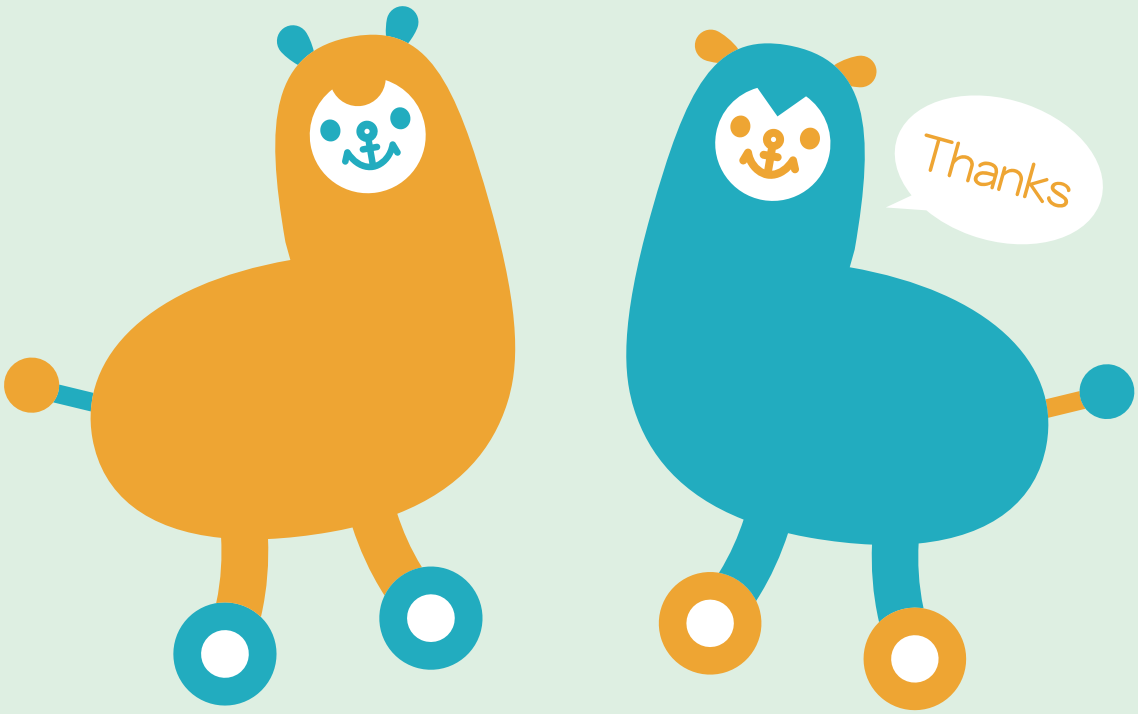
日本カーシェアリング協会
10年の歩み

寄付車でつくる
支え合いの仕組みを
石巻から全国へ



この冊子は、復興庁で 2021 年 2 月に発行された「地域づくりハンズオン支援事業ガイドブック 2020-2021」に特集として掲載されたものです。私たちの 10 年の歩みをとてもわかりやすく整理して紹介いただきましたので、許可をいただいて別刷りさせていただきました。
最近私たちと関わりができた方には、これまでの私たちの歩みを知ってもらえたらなと思っています。そして、長きにわたって応援してくださった方には、過去の活動などを懐かしく思い出しながら、我が子の成長を見守るようにご覧いただければなと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。

寄付車でつくる支え合いの仕組みを、石巻から全国へ

一般社団法人日本カーシェアリング協会 [宮城県石巻市]

カーシェアリング利用者グループ（カーシェア会）でのお出かけの際の記念撮影

寄付で集めた車を、平時と災害時の支え合いに活かす仕組みをつくる日本カーシェアリング協会。宮城県石巻市で始まった活動は、全国に広がってきている。小さなアクションから実績を重ね、活動を発展させてきた協会の歩みや、組織運営・ネットワークづくりの考え方は、成功の循環を生むためのヒントを提供してくれる。

Leader's Profile

吉澤 武彦 さん

一般社団法人
日本カーシェアリング協会
代表理事
内閣府 地域活性化伝道師
総務省 地域力創造アドバイザー

兵庫県姫路市出身。大学卒業後、6年の会社員生活を経て本格的に社会活動に従事し始め、平和や環境に関する様々なプロジェクトに取り組む。震災後、一般社団法人日本カーシェアリング協会を設立し、宮城県石巻市を拠点に寄付車を活かした支え合いの仕組みづくりに従事。

Organization Profile

■ **フィールド**
- 宮城県石巻市を拠点に被災地内外で活動
- 2020年には佐賀県武雄市にも拠点設置

■ **設立**
- 2011年7月（法人設立）

■ **職員数**
- 15名（2021年1月末時点）

■ **WEB サイト**
- https://www.japan-csa.org/

■ **所在地**

活動概要～寄付車を通じた支え合いの仕組みづくり

一般社団法人日本カーシェアリング協会（JCSA）は、震災後に宮城県石巻市で設立。寄付で集めた車を活用した支え合いの仕組みづくりをミッションとし、217台（2021年1月末時点）もの寄付車を活かして、コミュニティ・カーシェアリング（CCS）、ソーシャル・カーサポート（SCS）、モビリティ・レジリエンス（MR）の3事業を展開する。

CCSは、寄付車を地域コミュニティの中でシェアする事業である。地域から会員を募ってカーシェア会を設立し、ボランティアドライバーや予約・鍵の管理、お茶会（お茶っこ）の開催、会計管理などの役割を会員が分担し合う。車両の維持と運行にかかる経費は、利用の度にルールに基づいて預け、年に1度の総会で余剰金・不足金を精算。経費実費を利用割合に応じて分担する。車は高齢者の外出支援・病院への送迎のほか、個人で車を利用したいときにも使うことができる。会員が集まってみんなで買い物や日帰り旅行に出かけるなど、楽しみながら会を運営することも特徴だ。2021年1月末現在、石巻市では10地域・約450名（平均年齢約75歳）、市外でも8地域・約300名がCCSを行っている。

SCSは寄付車をレンタル・リースにより貸し出す事業である。一般の方への貸し出しに加え、ボランティアや震災伝承・NPOの活動に関わる方、移住者・起業家、生活困窮世帯の方などに低額で貸し出す仕組みを設けている。また、震災の被害と教訓を自動音声が案内する「語り部ナビ」、地域のお店を訪問することで割引が受けられる「地域おこしレンタカー」、離島など商用レンタカーの設置が困難な地域でも地元団体と連携して車を貸し出す仕組みをつくる「地域連携カーシェアリング」、大規模災害時に返却することを条件に低額で車を貸し出す「災害時返却カーリース」など、特色あるサービスを多数提供する。

MRは、台風・豪雨・地震などの大規模災害で車が流失・損壊してしまった方へ、寄付車を無償で貸し出す活動である。2015年の関東・東北豪雨、2016年の熊本地震、2017年の九州北部豪雨など、毎年起こる大規模災害の度に現地に出動し、被災者や支援団体に寄付車を貸し出してきた。さらに自治体・自動車関連業界団体等と協定を結び、有事の際に迅速に支援を提供するための平時からの体制づくりにも取り組んでいる。

こうした多岐にわたる事業の始まりと発展の経緯、今後進もうとしている方向性について、以下でご紹介する。

Vision 助け合いにあふれ、安心して暮らし続けられる社会

Mission 「寄付車」を活用した新しい支え合いの仕組みをつくり、石巻から全国に広げる

事業内容

コミュニティ・カーシェアリング（CCS）

車をシェアして支え合う仕組みを地域につくる

- 地域コミュニティで車をシェアし、楽しみながら支え合う関係を築く事業
- 石巻市内10地域、その他全国8地域で展開中

ソーシャル・カーサポート（SCS）

寄付車を貸し出すことで人と地域を元気にする

- レンタカー・カーリースで寄付車を貸し出す事業
- 支援を必要とする方への低額貸出、地域づくりや災害支援に貢献するプログラムなど多数展開

モビリティ・レジリエンス（MR）

災害のときに車で困らない仕組みをつくる

- 大規模災害時に車を失ってしまった被災者や支援団体に車を貸し出す事業
- 行政・民間との連携による平時からの体制づくりにも取り組んでいる

寄付で集めた車両

設立の経緯 ～ゼロからのスタート

JCSA 代表理事の吉澤さんは、大学卒業後、6 年間の会社員を経て、阪神大震災からの復興支援団体「神戸元気村」代表などとして活動していた故・山田和尚さんの下で、関西を拠点に社会貢献活動に携わっていた。東日本大震災後はすぐに復興支援に加わったが、その中で師と仰ぐ山田さんからやってみないかと提案されたのが、被災地の仮設住宅でのカーシェアリングだった。

東日本大震災では宮城県で約 14 万 6 千台、石巻市だけでも約 6 万台の車両が被害を受けたとされる。生活に欠かせない移動手段を失い、買い戻す余裕さえない被災者も多かった。吉澤さんはこのときほとんど運転しないペーパードライバーで、車に関しては全くの素人だったが、被災地の現状をなんとかしたいという想いから、師匠の提案に乗り、カーシェアリングの実現に取り組むことを決める。知識はなく、車も、シェアしてくれる人も見つかっていない、まさにゼロからのスタートだった。

Phase1 活動立ち上げフェーズ

カーシェアリング正式開始までの道のり

2011 年 4 月、最初に始めたのは車の確保だった。「会社四季報」を手に企業を次々に回り、1 ヶ月かけてようやく 1 台目を提供してくれる方を見つけた。次に吉澤さんは、石巻でシェアしてくれる人を探していく。仮設住宅団地でアンケート調査を重ね、仮設万石浦団地でパートナーとなってくれる方たちを見つけることができた。2011 年 7 月には JCSA の法人登記を済ませ、万石浦でのテスト運行を始めることになる。

ただ、正式なカーシェアリングの開始に向けては、行政機関との調整が必要だった。地域で車をシェアしながら、燃料・保険代・車検費用などの必要経費を分担し合う仕組みを、道路運送法に抵触しないようにどのように実現すればよいか、警察や県運輸支局と丁寧に調整することが求められた。会員との契約方法、鍵の管理方法、車の登録方法など、細かな点まで確認をとって認可を取得し、2011 年 10 月にようやく正式にカーシェアリングを開始することができた。

カーシェアリングを通じた支え合いの創出

カーシェアリングを始め、利用者同士の話し合いの場を設けてみると、話題は移動の問題から、身近な生活の問題へと広がった。「ゴミが散らかっている」「近所の交流がない」という問題意識を共有すると、月1回のゴミ拾いやお茶会が生まれた。すると 3 人で始めた活動に、次第に人が集まるようになっていった。一人暮らしのお年寄りが経済的に苦しいなかタクシーで病院に通っていることが話題になると、メンバーがその方の外出支援を買って出るようになった。

このようにカーシェアリングは、移動を支えるだけでなく、震災で近隣同士の関係がリセットされた仮設住宅団地の中に、コミュニティと支え合いを築くきっかけとなった。当時、仮設住宅団地では自治会を設立する動きが進められていたが、多くの団地で役員の引き受け手を見つけるのに苦労するなか、万石浦ではカーシェアリングのメンバーが役員となることで、スムーズに自治会が立ち上がったという。

支援の広がりと仮設住宅団地への CCS 本格展開

こうした活動がメディアでも取り上げられると、支援の申し出や利用希望者も増えていった。2012 年の初めには中古車販売大手のガリバーインターナショナル（現・IDOM）から 31 台もの車両の寄贈を受け、より多くの方に車を提供できるようになった。行政もこの取組の重要性を理解し、2012 年 2 月からカーシェアリング導入・運営支援を JCSA に委託するかたちで、カーシェアリング普及を強く後押しした。

以降、JCSA は地元の方を中心にス

2011年7月、最初の寄付車両でテスト運行を開始したときの様子

仮設住宅団地でのCCSの様子（仮設大森団地）

History

Year	Topics	
2011	4月	代表の吉澤さんが恩師（故・山田和尚氏）から提案を受け、カーシェアリング事業実施を決意
	5月	京都府の企業から1台目の車両寄付を受ける
	7月	石巻仮設住宅団地カーシェアリングテスト開始
	10月	公的機関の許可を受けカーシェアリング本格開始 ガリバー・インターナショナル（現・IDOM）からの車両寄付の開始
2012	2月	石巻市より「カーシェアリング・コミュニティ・サポートセンター」運営受託
2013	8月	三菱自動車から電気自動車寄贈
	11月	自家用自動車有償貸渡業許可、レンタカー事業開始
2014	3月	埼玉県秩父市豪雪被害で寄付車両1台を貸出 以降、大規模災害での車の貸出支援を開始
2015	6月	復興公営住宅でCCSを開始、以降順次会員・対象地域を拡大
2016	11月	カーリース事業の開始 東京海上日動火災保険との保険代理店契約締結
2017	11月	事務所移転 福島県の木造仮設住宅を再利用し現事務所に
2018	5月	地域づくりハンズオン支援事業による支援開始
	7月	豪雨被害に遭った岡山県倉敷市真備町の支援開始
	10月	岡山県内2地域でCCSの導入を開始
2019	1月	岡山県・日本自動車販売協会連合会岡山県支部・岡山県軽自動車協会と「災害時における被災者等の移動手段の確保に関する協定書」締結
	7月	滋賀県大津市と「コミュニティ・カーシェアリングの普及促進に関する連携協定」を締結
2020	5月	佐賀県・佐賀未来創造基金と「一般社団法人日本カーシェアリング協会の佐賀県への進出に関する協定」を締結
	6月	佐賀県武雄市に九州支部を設立

Phase1
活動立ち上げ

●ゼロからカーシェアリング、レンタカー・リース、災害時の移動支援の活動を立ち上げ、現在の事業の原型を築く
●代表の吉澤さんを中心に、地域の方たちの出番と役割を作りながら事業の幅を広げる

Phase2
成果蓄積・組織強化

●緊急支援から平時の支え合いを築く活動へシフトし、実績蓄積
●一方で、活動を発展させるためにチームとしての力を高める重要性に気づき、組織体制の強化へ

Phase3
普及展開・基盤強化

●石巻で作ってきた寄付車を活かす支え合いの雛形を発展させ、被災地内外へ普及する段階へ
●復興・創生期間の先を見据え、組織・経営の持続可能性を高める取組にも注力

Future

助け合いにあふれ、安心して暮らし続けられる社会への貢献に向けて…

◆アフターコロナの地域へのCCSのさらなる普及
◆支えを必要とする人や組織に寄付車を貸し出す仕組みの全国展開
◆有事に車に困らない社会の実現に向けた仕組みづくり
◆安定的な財源確保とビジョンに共感する人の集まる組織づくり

タッフを集め、仮設住宅団地にカーシェアリングを広げていくことになるが、そこで吉澤さんが意識したのは、「車の貸し出し自体ではなく、支え合う地域づくりを応援すること」だった。地域における車のシェアを、単なる「カーシェアリング」ではなく、「コミュニティ・カーシェアリング（CCS）」と呼んでいるのもこのためだ。JCSA は各地でカーシェア会の立ち上げと運営をサポートするが、車の予約や鍵の管理、経費分担の具体的な方法などは、利用者自身が自ら話し合って決めることを原則としている。利用者同士で一緒に買い物に出かけたり、日帰り旅行する企画も取り入れ、「困っている人を助けるというより、楽しい地域をつくる」というスタンスで、コミュニティの活性化に貢献している。

寄付車を活かすレンタカーと災害支援活動の開始

寄付車を活かした活動は CCS からさらに広がっていく。2013 年 11 月には、復興支援に当たる団体などからの車の利用ニーズに応えるべく、自家用自動車有償貸渡業の許可を受けてレンタカー事業を開始した。その後、JCSA ではカーリース・保険代理店事業にも着手し、ソーシャル・カーサポート（SCS）事業のラインナップを広げていく。

2014 年 3 月には、埼玉県秩父市での豪雪の際に、寄付車両の無償貸出を行った。このときの1件の貸出をきっかけに、JCSA では災害で車の被害を受けた方に寄付車を貸出すモビリティ・レジリエンス（MR）事業を継続していくことになる。

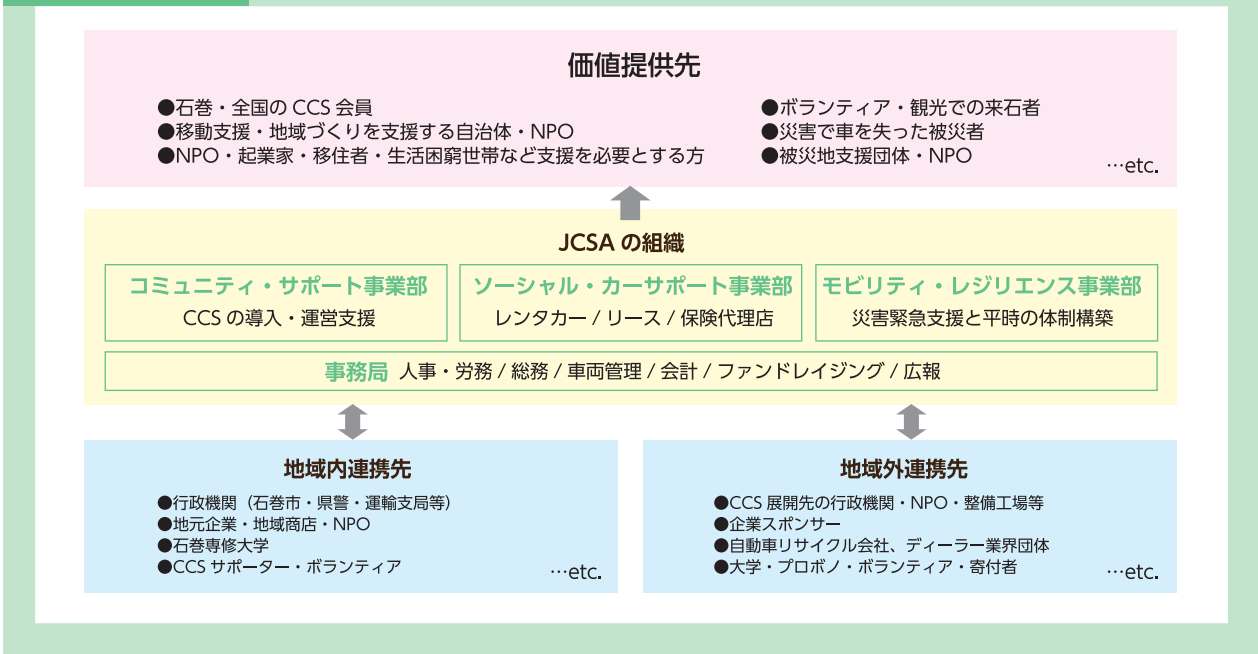
事業拡大の背景 ～動く、巻き込む、発信する

ゼロからのスタートながら、数年の間に事業をここまで広げることができた背景には、「動きながら考える」という吉澤さんのスタンスがあった。仮設住宅での住民同士のカーシェアリングという前例のない取組をスピーディに実現するうえでは、まずは小さく動き、実践の中で改善していくスタイルが適していたといえる。

また、少しずつ実績を積み重ねながら、周囲を巻き込んで取組を発展させていくことも、吉澤さんが当初から意識していたことだった。車両の確保に加え、タイヤ・オイルなどカー用品の用意、車両の運搬などで、JCSA では企業からの寄付・協力を得ている。デザイン・IT・法務などの分野では、多くのプロボノの協力も得てきた。地元石巻の石巻専修大学とも、自動車工学を学ぶ学生の授業の一環での車両点検・タイヤ交換、経営学部のゼミからの会計に関するサポートなどで、幅広く連携をとってきた。企業・プロボノ・大学のいずれに対しても、それぞれの強みを活かして無理なく続けられる連携の形を探り、建設的な提案をすることで、協力関係が広がってきた。

加えて、活動状況の発信も、当初から継続してきたことの一つである。自分たちの活動が発展し、成長していく様子を見てもらうことが、応援してくれる人の輪を広げ、社会的インパクトを高めることにつながると考えていた吉澤さんは、ブログ・メールニュースで

組織図/関係図



の情報発信や、地元紙等のマスコミへの対応を地道に続けてきた。情報発信の積み重ねにより、最近では年間 50 件、多い年では 100 件ほど、テレビ・ラジオ・新聞・ウェブ等に JCSA の活動が取り上げられるようになっている。

Phase2
成果蓄積・組織強化フェーズ

仮設住宅から復興住宅へ

仮設住宅団地の支援活動として始まった CCS は、2015 年 6 月に復興公営住宅団地で初の CCS が始まってからは、復興公営住宅を中心とした日常的な移動支援・コミュニティづくりの活動へと移行する。復興公営住宅への移転においても、仮設住宅と同様、住民の入れ替わりが発生し、新たに住民同士のつながりを築くことが求められた。高齢者の居住割合も高いため、交通弱者への対応も重要となったが、CCS はこうした問題へアプローチする手段として機能した。

CCS は日々の生活に彩りを与える役割も果たしている。CCS の会員は、必ずしも移動に困っているわけではない。会員同士で日帰り旅行に出かけ、お茶っこ（月 1 回のお茶会）の場でみんなと会って話すのが楽しいから参加しているという方もいる。ある高齢の女性は、震災後ショックからうまく話せなくなっていたが、CCS に出会い、会員の輪に加わるようになってからは、「みんなとお話したいから」と、補聴器もつけるようになった。

車の予約やお茶っこ・お出かけの企画としての役割を担うなかで、やりがいを感じている方も多い。地域活動に関わることの少ない男性も、ボランティアドライバーなどを担い、やりがいを持って CCS の運営に携わっている。その一人である青山さんは、以前は地域活動にはほとんど参加していなかったが、震災を機に「ちょっといいことしてぇなぁ」という想いが芽生え、CCS での病院への送迎などを積極的に引き受けるようになった。そこでもらう「いつもありがとう」という言葉を原動力に、8 年の長きにわたり活動を続けた。その間、復興住宅団地の団地会長を務めるなど、地域とのつながりも深まっていった。2019 年にドライバー役を引退し後進に譲った後も、カーシェア会の男性会員らと将棋倶楽部を結成して、仲間とともに日々を過ごしている。

カーシェア会でのお茶っこの様子。
会の運営を話し合う場だが、会員同士が交流し、親睦を深める機会ともなっている。

カーシェア会の日帰り旅行で、お花見に出かける様子。
日頃の移動には困っていないが、お出かけを楽しみに参加している会員も多い。

ドライバーを8年勤めた青山さん。人付き合いを好むタイプでなかったが、今では周囲に慕われる存在に。
（写真提供:あしたのコミュニティラボ　藤牧哲也氏）

事業の発展に向けた組織づくり

活動立ち上げフェーズでは、代表の吉澤さんのほか、主にカーシェアリング利用者など地元の方がスタッフとなって JCSA の事業が運営されていた。被災者でもある地元の方にスタッフとして活躍してもらい、出番と役割を提供することは吉澤さんの狙いでもあった。一方で、事業の企画と推進の中心を常に吉澤さんが担い、自分だけが引っ張っていく体制に限界も感じつつあった。

そんな 2015 年頃、JCSA の取組に共感し、一緒に働くことを考えてくれる意欲的な方が現れた。しかし結局、スタッフに加わってもらうことはできずに終わる。理由は、「自分は本気で「仕事」として JCSA に関わりたいが、今の JCSA ではそれができないから」というものだった。その言葉で、吉澤さんは、想いや理念を共有して同じ目線で仕事に取り組む仲間を集め、よりスピード感を持って前進できる組織をつくる重要性を痛感したという。

これをきっかけに、吉澤さんは採用活動や組織運営のあり方を見直していく。採用活動では、CCS 利用者の受入やハローワークを介した募集だけでなく、石巻での復興支援ボランティア等をきっかけに出会い、JCSA の活動に共感してくれた人たちへの声掛けも積極的に行うようになった。SCS 事業の事業部長を務める石渡さんや事務局長の西條さんも、こうした声掛けから JCSA に参画した仲間で、今では同じ目線で仕事に取り組む欠かせない存在となっている。

組織運営では、経営理念や行動指針を言葉にして共有したり、事務所のキッチンスペースで作ったランチを一緒に食べたり、事業部長とスタッフとの月 1 回の個別面談（1on1 ミーティング）を重ねたりと、チームとして想いを共有しコミュニケーションをとる機会を意識的に設けるようになった。やりがいと成長を感じ、働きたい・働き続けたいと思える環境づくりは、現在も JCSA の重要なテーマの一つだ。最近でも、外部研修の受講によるスキルアップをサポートする仕組みの導入、人事評価制度の改善などの取組が続けられている。

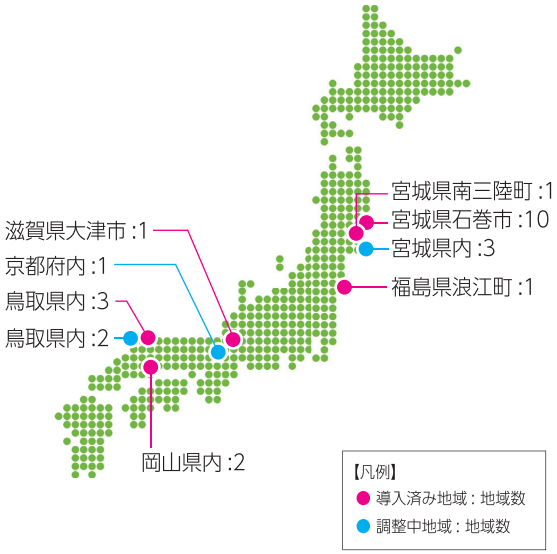
Phase3 普及展開・基盤強化フェーズ

石巻で築いた雛形を全国へ

吉澤さんは、CCS を石巻だけの活動に終わらせず、その雛形を全国に広げることを当初から構想していた。石巻での実績を積み上げる期間を経て、2018 年度、地域づくりハンズオン支援事業のサポートを活用して構想の実現に取り組むこととなった。

CCS を地域で新たに始めるには、外出支援のニーズ把握、運営体制づくり、車両・保険の手配、運輸局など行政機関への説明といった事前調整が欠かせない。そのうえで地域住民の方への説明会や CCS のテスト実施を行い、カーシェア会を正式に立ち上げる流れとなる。ハンズオン支援では、一連のプロセスを円滑に、かつ道路運送法に抵触しない形で安心して進められるようサポートする有償プログラムを開発し、全国各地に紹介した。結果として、岡山県内の 2 地域に実際にサポートを提供し、カーシェア会が設立された。その後の JCSA による普及活動の結

CCS の全国への広がり



岡山県内2地域を皮切りに、全国へCCSの輪が拡大中。
中山間地域、郊外団地、市街地など多様な地域で展開。

鳥取県米子市の「永江ささえ愛カーシェアクラブ」は100名を超える会員が加入、
県内でも注目される事例に。

岡山県倉敷市真備町での災害支援による貸出の後、返却に訪れる利用者の様子。

2020年7月豪雨・熊本県人吉市の復旧活動に利用されるJCSAの車両。
片付けにも車の力は欠かせない。

2019年1月、岡山県での連携協定締結の様子。
災害への平時からの備えをつくるモデルケースとなった。

2020年6月に設置された九州支部に配置された車両。
支部は7月の九州豪雨支援に車両を届ける拠点として活躍。

果、現在は 8 地域まで導入地域が広がり、さらに 6 地域で導入に向けた調整が進んでいる。

災害時に備えた平時からの体制づくり

MR の活動もバージョンアップしている。転機となったのは、2018 年 7 月に豪雨災害に見舞われた岡山県倉敷市真備町の支援だった。

それまでの災害支援では、JCSA が自ら車の寄付を募り、企業や個人の協力を得ながら被災地に運搬してきたが、届けられる車の台数と支援の規模には限界もあった。真備町への支援では、現地に支援入りする JCSA の様子を報道で目にした伊原木岡山県知事の働きかけで、自動車販売業界団体や倉敷市の協力が得られた。これにより JCSA が集めた車両を含めおよそ 100 台の車を確保し、市の体育館と駐車場が拠点として利用可能ととなった。結果として、それまでの災害支援の約 10 倍にあたる 600 件超の車の貸出を行うことができたのである。

こうした官民連携による支援を、次の災害に見舞われたときにも迅速に実現できるよう、2019 年 1 月には、岡山県、日本自動車販売協会連合会岡山支部、岡山県軽自動車協会、JCSA の 4 者で、災害時における連携協定も締結された。

さらに、2019 年 8 月の佐賀県武雄市の豪雨被害への支援（105 件の車の貸出を実施）は、佐賀県との平時からの関係を深めるきっかけとなった。2020 年 5 月には佐賀県、佐賀未来創造基金と「佐賀県への進出に関する協定書」を締結し、6 月には武雄市に九州支部を設立。武雄市には災害支援に使用した車両を配置し、九州での災害支援に迅速に活用できる体制を整えた。この結果、2020 年 7 月に熊本県をはじめ九州一帯を襲った豪雨では、迅速に車を被災地に届けることができた。JCSA では、九州支部を拠点に生活困窮世帯への車の貸出や「災害時返却カーリース」などの SCS 事業にも着手。さらに CCS の普及活動も進めていく予定だ。

Future
今後に向けて

アフターコロナの社会に対応した CCS の普及活動

CCS は少しずつ全国に広がり、JCSA への問い合わせや視察の希望も多く寄せられているが、コロナ禍に直面してからは、地域の中で移動支援の活動が始めづらく、JCSA としても現地サポートに出向きにくい状況となっている。JCSA では、動画教材やオンライン面談を中心にサポートプログラムを組みなおし、アフターコロナの地域で CCS をさらに広げるべく準備しているところだ。

拠点とパートナーシップを核にした取組の横展開

JCSA では、SCS や MR の活動も全国に広げていくことを目指している。そのために、佐賀に設立した九州支部のように、車両を設置する拠点をさらに増やしていくことが検討されている。拠点を核に、災害時の支援と平時の支え合いの仕組みを広げていくことが今後の大きな目標となっている。

また、MR の活動では、岡山県の例のように、自治体と民間団体を巻き込んだ連携の枠組みを広げることも目指している。2021 年 2 月にはまず熊本県で同様の連携の枠組みが立ち上がる見込みだ。もし東日本大震災のような巨大な災害が再び起きたとき、JCSA の力だけでは車を失った人へのサポートを提供しきれない。平時からのパートナーシップ拡大も、今後の JCSA の重点目標の一つである。

財源確保の仕組みづくり

こうした大きな目標を達成するには、JCSA が組織としての魅力を高め、ビジョンに共感する人をさらに集めていくことが求められる。同時に、財源の確保も必要となる。

当初、JCSA では、CCS の普及に向けた石巻市からの委託事業費や、民間企業・財団等からの助成金を主な財源として活動していたが、震災から時間が経つにつれてこうした財源が先細りしていくことを見越し、財源の多角化に取り組んできた。例えば地域外への CCS 導入支援や視察・講演対応による収入、レンタカー・リースによる収入、保険代理店事業による収入、クラウドファンディングや寄付による収入確保に取り組み、徐々にその比率を高めている。

加えて、2019 年から始めたのが車の「リサイクル寄付」だ。リサイクル寄付では、状態が悪く、貸出に利用することが難しい車を含めて寄付で引き受ける。それを全国の自動車リサイクル企業と連携して解体し、パーツを資源として流通させるとともに、査定金額を JCSA が寄付として受け取る仕組みである。また、2020 年からは、九州支部を設けることになった佐賀県との連携により、ふるさと納税を通じて JCSA に寄付できる仕組みも設けた。

JCSA では、これら独自の仕組みも含めて、多様な方法でこれからの事業展開に必要な財源を確保していく考えだ。

Insight 成功の循環へのヒント

最後に、JCSA の活動の経緯から、地域づくり団体が人とチームの成長を支え、プロジェクトの成果やネットワークを拡大していくうえでどんなヒントが得られるか、整理していく。

人とチームの成長を支えるために

JCSA は被災直後の石巻で、ゼロから CCS という新たな仕組みを築いた。その中心となった吉澤さんの活動スタンスは、動きながら考え、積極的に周囲を巻き込むというものだった。吉澤さんが社会活動の師とする山田和尚さんは、「タイヤのように動け、コマのように動くな」という言葉を残した。コマのように同じ場所を一人で回り続けるのでなく、タイヤのように周囲を巻き込み、風景を変えながら動け、という意味を持つ。吉澤さんに引き継がれたこの教えは、地域づくりに携わる多くの人のヒントとなるだろう。

また、CCS の現場では、会員それぞれが出番と役割を持つなかで、楽しさややりがいを得ている。地域の方たちを単に支援される側ではなく、役割を持ってともに課題解決に取り組む主

新たに始めた「リサイクル寄付」では、こうした運行が難しい車両もJCSAの寄付の原資として活躍可能に。

CCSの導入サポートを遠隔でも円滑に実施できるよう、動画教材の制作にも取り組んでいる。

体として巻き込んでいくことも、JCSAならではのノウハウといえる。

加えてJCSAは、事業拡大にあたり、代表の吉澤さん中心の事業運営を見直し、同じ目線で行動できる人材の確保と育成に力を入れてきた。事業を支えるコアチームづくりの重要性も、JCSAの歩みが教えてくれる教訓の一つである。

プロジェクトの成果拡大に向けて

CCSは1台の車をシェアすることから、SCSは復興支援団体へのレンタカーから、MRは災害時の1台の無償貸出から事業が始まっている。まずは小さな実践の中から学びを得て雛形をつくり、大きく育てていくスタンスは、地域づくりの活動を発展させていくうえで大切なものといえる。

活動財源の確保にあたっては、行政委託・助成金に加え、多様な財源確保の手段を模索することで、徐々に自主事業や寄付による収益の比率が高められてきた。車の「リサイクル寄付」をはじめJCSA独自の仕組みも開発されている。自分たちらしい持続可能な財源確保の仕組みを模索することが、これまでのJCSAの歩みを支えてきたといえる。

また、情報発信も活動の広がりを生む大きな要素の一つとなってきた。活動開始以来、地道に続けてきたブログ・メールニュースやSNSでの情報発信、マスコミ対応の積み重ねは、事業を他地域に広げるうえでの力となり、寄付や支援の拡大にも貢献してきたといえる。大きな成果を出すまでの道のりの途中であっても、成長の過程も含めて発信し続けてきたJCSAの取組は、他の地域づくり団体にとっても参考になるだろう。

ネットワーク拡大に向けて

企業、業界団体、プロボノ、大学、行政など、様々な団体や個人とつながり、連携を築いているのもJCSAの大きな特徴の一つだ。連携を広げるために吉澤さんが意識しているのは、シンプルに「建設的な提案をすること」だ。

相手のことを理解して、無理なく実行でき、メリットがある連携の形を提案できれば、組織や人は動かせる。よりよい社会をつくる意志を持って、適切な相手に、建設的な提案を堂々と行うことが大切、と吉澤さんは語る。

もちろん提案がうまくいくケースばかりではないが、こうした姿勢で行動を積み重ねてきたことが、JCSAのネットワークの広がりを生んできた。ネットワーク拡大に向けても、動きながら考え、小さな実績を積み重ねていくことが重要といえるだろう。

成功の循環へのヒント

人とチーム
の成長を支える

- ✓ 動きながら考え、巻き込む
- ✓ 一人ひとりの出番と役割をつくる
- ✓ 同じ目線で行動できるコアチームを築く

プロジェクト
の成果を拡大する

- ✓ 小さな実績を起点に、取組を拡大する
- ✓ 自分たちらしい持続可能な財源確保の仕組みを模索する
- ✓ 成長の過程を含めた情報発信を続ける

ネットワーク
を広げ活かす

- ✓ 互いの強みを活かし、無理なく続けられる連携の形を提案する

facebook.com/japancsa

石巻発、寄付車でつくるやさしい未来
日本カーシェアリング協会
Japan Car Sharing Association

〒986-0813
宮城県石巻市駅前北通り1丁目5-23

TEL：0225-22-1453
FAX：0225-24-8601
MAIL：info@japan-csa.org
HP：https://japan-csa.org